

旗差物の儀仗

十里餘午前十一時、英吉沙爾（英ギサール）の接館に着するや、英吉沙爾廳官李參將（陶）を初めとし、文武官の歡迎甚だ盛なり。同三十分美麗に裝飾せる轎車に乘じ、旗指物を翳せる儀仗の兵士に擁護せられつゝ入城す。沿途觀る者堵の如し、斯くて正午の頃祝砲の轟くと共に、兼て準備せる公館に入る。小憩の後答禮の爲め文武衙門を往訪し、夕刻小宴を公館に開く。軍隊は歩隊一營（百六十人）馬隊一旗（五十騎）を置き、城内には漢民百十五戸、漢回八戸、纏頭六十戸、南關には纏頭二百四十戸ありと云ふ。

二十六日午前六時三十分出發、文武官の見送るもの到着時と同じ。東南に丘陵あり、城に接して崖を成す、崖に沿ふて行く二里餘、一河ありサハーンと稱す。此より鹹土帶收草生じ、部落相連り、トプロノ（人家約百五十戸）コシケンベス（人家約六十戸）タメイ（人家約百三十戸）クドツク（人家約八十戸）チャマルン（人家約百戸）等の各小沙島を経て行程約十五里、黑孜爾浦（プ）に着す。是日陶參將、特に予を送る數里、屢々之を辭するも聽かず、曰く、喀什噶爾提督の命なりと、周旋甚だ勉めたり。

參將予を數里の外に送る

二十七日行くこと數町、前途皆沙磧の地、往々獨立家屋を送迎して行程約十二里、一小沙島即ち巴爾欄干（パルランカン）に着す。沿途二、三の獨立家屋を見るのみ。蓋し黑孜爾浦